

## 浪江のむかし話・II

### ○ かめのしっぽが切れたわけ

むかし、幾世橋地区のおはかに、<sup>ほどけさま</sup>仏様を乗せて<sup>と</sup>飛んでいたというかめがいた。このかめはいつも仏様の近くにいて、大きな石柱を背<sup>せ</sup>中に<sup>なか</sup>乗せていた。

おはかの近くに、古くから続く大きな酒屋があった。夏のあるばんのこと、おかしな大男がのっそりこの酒屋に入ってきて、お酒をたくさん買って行った。主人は、近くに<sup>ほうじ</sup>法事でもあるのかと思い、売ってやったが、その男は毎ばんやってきては、たくさん買って行く。

きみょうなこともあるものだと思い、ある夜、主人がこっそり後をつけて行くと、なんとその大男は、おはかのかめで、仏様のそばにすわっては、ぺろりっぺろり、と舌なめずりをしながらお酒を飲んでいるではないか。

びっくりした主人が、村の若いしゅうに相談をした。最初はこわがっていた若いしゅうだが、

「よし、おれが行って、しっぽを切り落として動けないようにしてやる。」

と言って、昼間のうちに石のかめのしっぽを切り落としてきた。

それ以来、この酒屋にはぶつつりと大男はこなくなつたそうなの。

今も、だいしょう寺うらのおはかにはしっぽを切り落とされた、石のかめがいる。

